7 おわりに

「歴史は二度と同じことを繰り返さない」は真理であるが、過去のもの造りの歴史を精緻な技術の筋目で洗ってみると、技術開発の教訓とともに技術発展の必然性が見えてくるのも真理である。

増子先生と雀部先生のご教導により、筆者がかつて関与した埋もれかかったもの造りの歴史のひとこまを振り返り考えることが出来た。半分は懺悔録であり、半分は技術屋の執念でもあったが、もの造りの歴史のダイナミズムから将来への教訓と発展の方向付けのヒントが少しでも出てくれば技術者冥利に尽きるというものである。

このような機会を与えていただいた増子舜先生、雀部実先生に感謝申し上げます。

参考文献

1）丸川雄浄，城田良康，姉崎正治，平原弘章：鉄と鋼，2（1981），323.
2）大谷正康，徳田昌則，井上博文：鉄と鋼，（1980），A 137.
3）日本鉄鋼協会製鋼部会（住友金属工業提出資料），鋼，86（1983）
4）丸川雄浄：東北大学工学博士学位論文，（1982）
5）丸川雄浄，山崎　勲，村上陽一，広木伸好，黒木隆秀：鉄と鋼，69（1983），221.
6）丸川雄浄，広木伸好，城田良康：耐火物，9（1984），498.
7）丸川雄浄，姉崎正治，城田良康：鉄と鋼，67(1981) 2，323.
8）クリーンジャパン，住友金属工業株式会社鹿島製鉄所，40（1983），5.
9）丸川雄浄：日本学術振興会製鋼第19委員会，1（1997）
10）丸川雄浄：日本鉄鋼協会，ふぇらむ，3（1998），23.

（2000年3月2日受付）

ふぇらむの窓

ふぇらむ「私見・鉄の歴史の周辺で」記事募集のご案内

この度、「鉄の歴史」の新シリーズとして、「私見・鉄の歴史の周辺で」シリーズを企画致しました。その趣意書は下記の通りです。

従来通り、会報委員会企画もございますが、広く読者の皆様からの御投稿を歓迎致します。「アラカルト」か「ふぇらむの窓」に掲載したいと思います。

なお、比較的まとまったものは、投稿記事であっても、依頼原稿並に扱って、常設の「鉄の歴史」の中の小ジャンルとして取り扱いたいと考えております。

「私見・鉄の歴史の周辺で」の目的・趣旨

「ふぇらむ」誌は創刊に際し、鉄鋼技術発展の歴史を保存資料として記録を残しておきたい、という意図の下に「鉄の歴史」のジャンルを企画し、今までに「戦後復興・発展期における我が国」鉄鋼製造技術史（技術編、学術編）」シリーズ、およびその他貴重な記録を掲載して参りました。そして現在、「鉄の人物史」シリーズを連載中であります。

さて、一般に鉄の歴史の記述では、ともすれば、学術的な正確さを期する余り、膨大な資料と定説が重視されることが考えられます。一方、より面白く読める、史実から多少は離れた観点からの歴史的考察も興味のあるところです。また、歴史を学ぶ目的の一つに「温故知新」があると思います。

以上の観点より、本シリーズでは、鉄（金属）の技術史を学ぶ中で、読者（著者）が疑問に感じたこと、関心をもったことなどを綴ってもらおうとするものです。通常の鉄の技術史の記載には出てこない異なった視点や観点からの考察が期待されます。このような観点からの記述は、史実と遺物にもとづいた、通常の技術史の中ではお目にかかれません。大胆な推理展開があっても、その前提をはっきりさせて論旨を展開することは、技術史を学ぶ上でも役に立つものと考えます。

また、執筆者御自身が鉄鋼技術者として、実際に業務等で係わった貴重な事例・体験を「鉄の歴史」の流れの視点で捉えて記録として残して頂くことも大変有意義だと思います。それらは生きた教訓として、形を変えて後輩の技術者に受け継がれていくことでしょう。

更に趣旨を拡げて、鉄の歴史に関わる技術史だけでなく文化史的なことまで視野を拡げ談話室風読み物として御執筆頂くことも歓迎致します。また、例えば、「たたらはどうしてあの程度の低い高さに止まったのか？」、「前近代の日本では、なぜ高炉法が生まれなかったか？」など、小説風な読み物も面白いと思います。

（東京理科大　大河内　春乃　2000年4月3日受付）